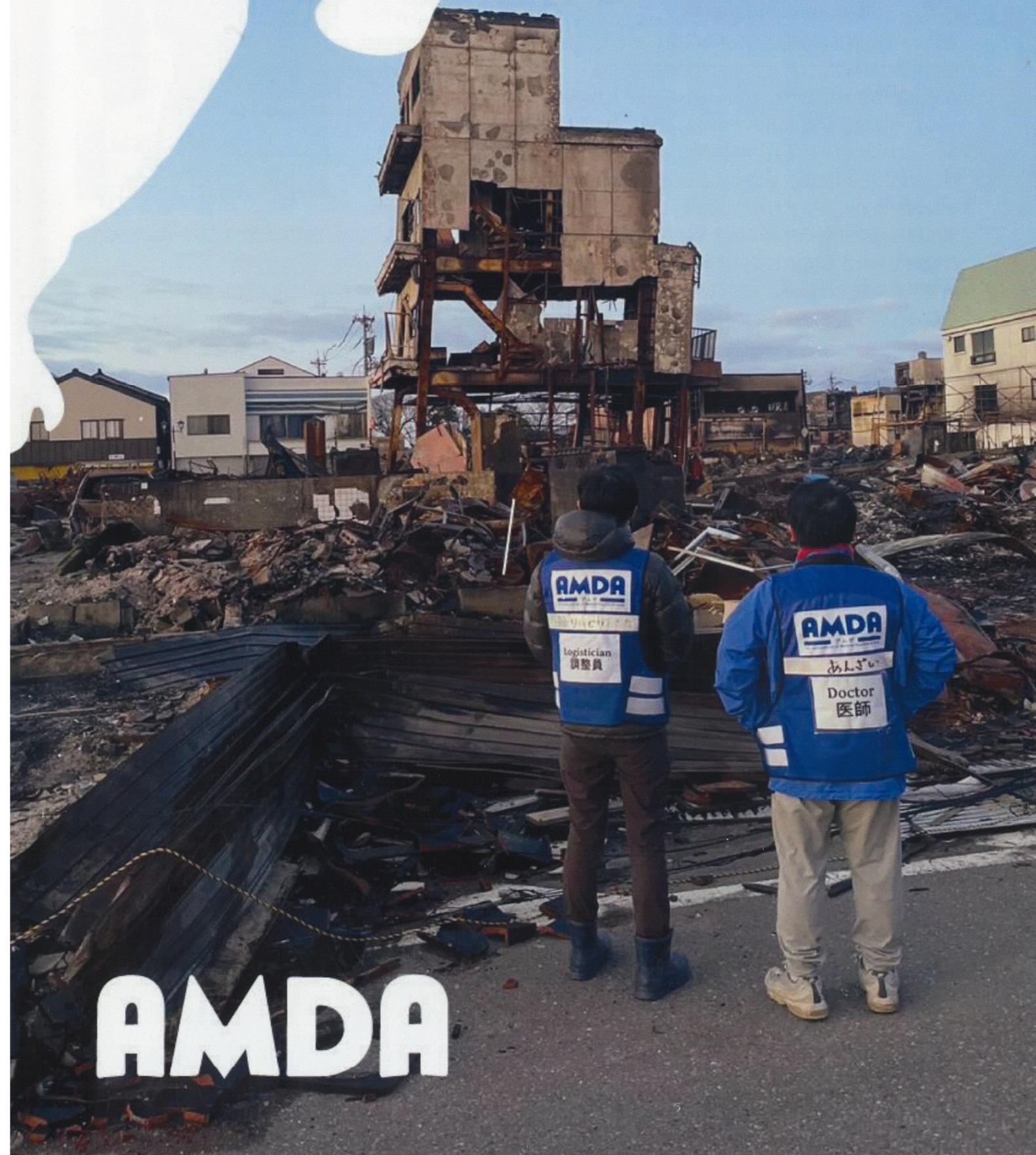


AMDA (アムダ) 令和 6 年  
能登半島地震・豪雨被災者緊急支援活動報告書  
～南海トラフ地震・津波に備えて～



AMDA

# 第二部： AMDA令和6年能登半島地震復興支援活動

## 1.活動概要

### 活動概要

活動期間	2024年4月24日～8月7日
活動場所	輪島中学校ほか
活動の種類	復興支援
派遣者数	AMDAからの総派遣者数のべ27人（4月24日からの復興支援活動として） ・看護師/2人 調整員/5人 ・IPU・環太平洋大学サッカー部/コーチ1人 ・IPU・環太平洋大学サッカー部/学生19人



### 活動のタイムラインと活動地、活動内容の推移

- 4/24～4/26  
輪島中学校を訪問し、情報収集を行う
- 7/9～7/11  
輪島中学校訪問。輪島市教育委員会を通じ、輪島中学校の復興支援活動をAMDAで行うことが決定
- 8/5～8/7  
AMDAと連携協定を締結しているIPU・環太平洋大学のサッカー部有志による協力のもと、輪島中学校復興支援活動を実施

### 活動の詳細

#### 4月24日～26日

輪島中学校を訪問。中学校再開を受けて校舎にいた避難者はすべて体育館とアリーナに集約され、教室には集団避難から帰ってきた中学生が戻ってきていた。しかし、近隣小学校の仮設校舎が完成するまでの間、小学生が中学校の空いている教室を利用している様な状況であった。地域の復興状況は完全では無いが、水道においては主要箇所を中心に復旧が徐々に進んでいた。

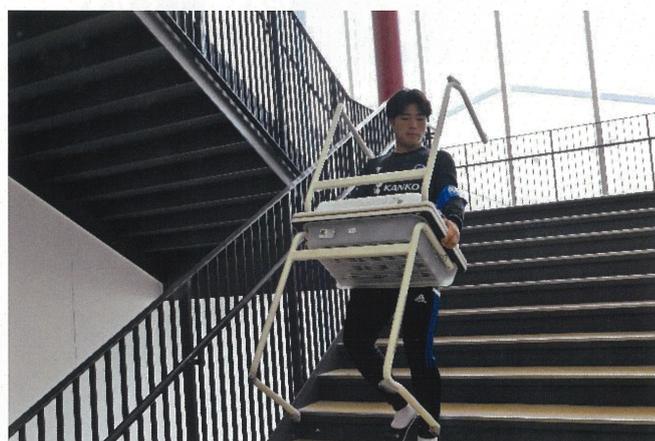
7月9日～11日

前回輪島中学校に訪問したときの話を聞き、輪島中学校の校長先生と面会してその後の状況を伺った。現在輪島中学校の空き教室を利用している小学生たちが、2学期からは各小学校の校庭に出来る仮設校舎に移動する予定とのこと。これを受けて、輪島市教育委員会を通じ輪島中学校の復興支援として教室の掃除や机の移動などを行うボランティア活動をAMDAで行うことが決まった。

8月5日～7日

AMDAと連携協定を締結しているIPU・環太平洋大学のサッカー部の学生19人とコーチ1人の20人と、AMDAから看護師2人、調整員1人の総勢23人で、5日にバスで岡山を出発し輪島中学校へ向かった。6日朝から、小学生たちが使っていた教室の掃除と、2学期から中学生たちが使う教室の準備のため、机の移動などの作業を行った。

作業は6日午前中で終わり、午後からは輪島中学校のサッカー部と今回活動に参加しているIPU・環太平洋大学の学生によるサッカー交流を行った。



## 第二部： AMDA令和6年能登半島地震復興支援活動 2.活動に対してのメッセージ

### AMDAとの活動にあたって

IPU・環太平洋大学 学長 大橋 節子

AMDAの「救える命があればどこまでも」というスローガンを共に実践したいと、IPU・環太平洋大学は立ち上がりました。

今はまだ「出来る事を全力で」という段階ではありますが、日本で、世界で起きている「辛い出来事に寄り添う行動」をAMDAからの情報や要請をもとに活動しようと決意しています。

2024年1月1日「1年の計を家族揃って」との願いに溢れたその日に多くの生命、財産を失った石川県輪島市へのボランティアへ赴いたIPU学生達。被災状況を目の当たりにし声も出なかったと報告してくれました。

天変地異があらゆるところで起きています。  
物資の供給では補えないのが「心のケア」です。

IPUでは「学生の笑顔と体力」で被災地の方々を支えることを念頭にしています。被災地の皆様が「期待する活動」は何かをAMDAとも協議させていただき実施しました。結成40周年を迎えられ多くの成果を残しておられるAMDAとの連携をより強固にし、どんな困難があっても「笑顔」で過ごせる日常を取り戻せるよう全力で継続的な活動を続けたいと思います。今後とも「人の道」を学生にお伝えいただけますよう心からお願いいたします。



2024年9月4日  
IPU・環太平洋大学にて行った活動報告会の様子

(注)メッセージは原文のまま掲載しております。

## 優しさと相互扶助

調整員 平野 晃

実際に被災地に行かせて頂き、メディアで見聞きする情報だけではわからない甚大な被害の全貌を目の当たりにして、自然災害の厳しさ、怖さをあらためて感じました。私自身初めての調整員業務でしたが、自分のすべきことがあまりわからず、終始受動的な行動になってしまったことが反省点です。今後活動に参加させていただく機会があれば、より広い視野での判断と、積極的な行動を心がけ、他スタッフの業務が円滑に進むようにサポートできたらと思います。

また自分自身に余裕がなく、避難者の方々とあまり交流をもてなかったのが心残りの一つではありますが、住民代表として避難所運営にご尽力されていたあるご夫婦との出会いはとても貴重なものでした。ご夫婦の御自宅は全壊してしまい、計り知れないほどの辛い状況にもかかわらず、『私たちにできることは何でもさせてもらおう』、『今こそ輪島の皆さんに恩返しがしたい』と奮闘されているお姿にとても感動いたしました。

また、これは以前熊本の支援に参加した時にも感じたことですが、AMDの活動は単に医療を提供する支援ではなく、避難者の生活背景を把握し、一人ひとりの『心』に寄



り添うことだとあらためてわかりました。

また活動に参加された方々は、家族や職場に無理を言って、何とか家庭や仕事の都合をつけて来られている。その熱意に感銘しました。最後一緒に活動を終えた看護師の方が言いました。『一度でも被災地の支援に入ってその現状を知ってしまうと、次にどこかで被災があったら居ても立っても居られないんです』と。被災を我が事と思って行動できるその姿に強く心を打たれました。被災がないことが最も良いことですが、そんな考えを持った人が世の中に増えていけば、紛争や争いのない平和な世界になると感じました。

この度の地震で亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げるとともに、今後も自分にできる支援をさせていただきたいと思います。

## 第四部： 各活動へのメッセージ

### 1. 支援活動に参加して下さった派遣者からのメッセージ

【地震復興支援活動に参加して下さった方からのメッセージ】

#### IPU・環太平洋大学サッカー部 坂手 雅斗コーチ

まず能登半島地震で被災された方々へ心よりお見舞い申し上げます。私自身が輪島中学校復興支援ボランティア活動に参加させていただき、感じたことを述べさせていただきます。

輪島市に行かせていただき、被災地はまだまだ復興といえるほどの状態ではないと感じました。道路横には倒壊した家、下敷きになっている車、高速道路は崩れて通行できないなどが当たり前のように目の前に広がっていました。テレビで間接的にしか見たことのない景色を実際に観ると、衝撃を受けました。その大変な中自分たちがボランティアに参加させていただき、中学校の復興を手伝わせていただいたことに感謝しております。

実際に活動としては各教室の復興作業(机や椅子の運搬)、輪島中学校のサッカー部さんとの合同練習をさせていただきました。この地道な一步一步が復興へと繋がっていくと

思います。微力ではあると思いますが、少しでも復興の一步の力になれば嬉しく思います。

災害というのは起きないことが一番ですが、何かあった際はまたAMDさんの活動で、お役に立てることがあれば参加させていただきたいと思っております。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。

IPU・環太平洋大学4年 井ノ口 彰梧

ずっと被災地での復興支援を行いたいと考えていました。そんな時に能登半島でボランティアをやりませんかというお話を聞いて迷わず行きますと答えました。実際に行ってみると道路は崩れていたり、割れていたりと爪痕が残っていました。中学校のグラウンドは半分が地割れして崩れて

いました。その中でもできることをやって先生たちからの「ありがとう」さらに、中学校のサッカー部の子たちとサッカーをすることで笑顔を見ることができたのでやってよかったと思いました。

IPU・環太平洋大学4年 宇田 尚立

このたび、輪島中学校の復興支援活動に参加し、地域住民や学校関係者の皆さまと共に貴重な時間を過ごすことができました。活動内容としては、校舎の清掃や修繕作業、地域の伝統文化を取り入れたイベントの企画・運営、生徒との交流会を行いました。これらの取り組みを通じて、地域の方々との絆を再確認するとともに、未来を担う生徒たちに元気を届けることができたと感じています。

特に印象的だったのは、地域住民の皆さまの温かい支援と生徒たちの笑顔でした。復興への道のりは決して平坦ではありませんが、地元の方々の「この場所を守り続けた

い」という強い思いに触れるたびに、私たち自身も大きな力をもらいました。また、生徒たちが真剣に未来を語る姿からは、この地域が持つ可能性と希望を感じました。今回の活動を通じて、支援とは一方的なものではなく、互いに学び合い、励まし合うものであると改めて実感しました。

今後も継続的な支援が必要であり、私たち一人ひとりができることを考え、行動する重要性を感じています。輪島中学校とその地域の未来が明るいものであることを心から願い、今回の報告を終わります。

IPU・環太平洋大学4年 友成 翼

AMDA能登半島のボランティア活動リーダーさせて頂いた友成翼です。

今回はこのような貴重な機会を経験させて頂き本当にたくさんの方に感謝しています。能登半島ボランティアに参加させてもらい、まだまだ復旧途中の所はたくさんありこれからまだ多くの人の協力がなくてまだ先は長いなと思いました。だけど自分自身も何か被災地の方への力になれるように1番に誰よりも動き活動に取り組む志で行いました。まだ復旧まで長い道のりになると思いますが、現地の多くの方にもお世話になり言葉で言うのは簡単ですが心の底から早く能登の綺麗な街に戻る事を願っています。ありがとうございました。



IPU・環太平洋大学4年 網島 基起

能登半島地震の支援ボランティアに参加して、被災地の状況を実際に目にし、支援の重要性を強く感じました。現地の方々々が不安や疲れを抱えながらも前向きに生活を再建しようと努力している姿に感銘を受け、自分が微力ながらも役に立てることにやりがいを感じました。また、チームワークの大切さを再確認し、現地の方々々と協力し合うことで、少しでも早く復興出来るよう努めました。この経験を通じて、人と人とのつながりの力を実感し、今後も地域社会への貢献を続けていきたいと思いました。



### IPU・環太平洋大学3年 松瀬 大河

テレビや新聞で日々報道されており、震災にあった地域  
のことはよく分かっているつもりで望んだボランティアで  
した。しかし、石川県の高速道路に入った時点で、私がテ  
レビ越しに見ていたのはほんの1部に過ぎなかったんだと  
痛感しました。ひび割れた地面、崩れた土砂、もう使えな  
いであろうグラウンド。全てに衝撃を受けました。子ども  
たちが普段通りに生活できていたらもっと色んなことがで  
きて、かけがえのない子供時代をもっと華やかなものに  
できていただろうと考えると胸が苦しくなりました。

私は少しでも楽しい時間にしてもらおうと一緒にサッ

カーをすることを心待ちにしていました。グラウンドに向  
かったら、想像もつかない辛い震災を乗り越えた後とは分  
からないほど、楽しそうにサッカーをする子どもたちの姿  
がありました。サッカーを通じて助け合って、乗り越えて  
いる姿を見て、私の方が元気を貰ったといっても過言では  
ないと思います。今回の活動に参加させて頂き、初めての  
経験や体験が多くありました。日本は災害大国で、またど  
こで、災害があるとは予測できません。そんな中で、1人  
でも多くの力になれる人になりたいと感じました。

### IPU・環太平洋大学3年 塚越 柊太

被災地支援活動に参加させていただき、輪島中学校サッ  
カー部の子どもたちや地域の皆さんと共に作業すること  
で、改めて災害の影響と地域のつながりの大切さを実感し  
ました。特に、校内清掃や机・椅子の運びなど、日常の環  
境を整える作業を一緒に行う中で、子どもたちの明るさや  
前向きな姿勢に励まされました。また、彼らが未来に向  
かって進もうとする姿勢に感動し、少しでもその力になれ  
たことに感謝の気持ちでいっぱいです。

災害はいつ誰に降りかかるか分からないものであり、支  
え合いの精神が何よりも重要だと感じます。復興には長い

道のりがあるかもしれませんが、被災地の皆さんが少しで  
も安心して過ごせる日が早く訪れることを願っています。  
そして、また同じ地域で力を合わせられる機会があれば嬉  
しく思います。



### IPU・環太平洋大学3年 富山 慈温

私は輪島中学校の復興支援活動に参加させて頂いて、被  
害の大きさに衝撃を受けました。能登半島地震が発生して  
から時間が経過しているのにも関わらず、校庭の一部が崖  
から崩れており、地面が割れているのを見ました。また、  
街ではいまだにビルなどの建物が倒れているままでした。  
そして、私たちは輪島中学校で校舎内の掃除や運搬作業を

手伝ったり、サッカー部の生徒と一緒にサッカーをしたり  
して楽しみました。私たちがしたことは些細なことではあ  
りますが、少しでも助けになっていたり、子どもたちに元  
気を与えることができたら嬉しいです。まだまだ復興  
に時間がかかるとは思いますが、気持ちで負けないように  
元気に過ごして欲しいです。

### IPU・環太平洋大学2年 江上 竜汰

僕が今回この能登半島ボランティア活動に参加してみて  
感じたことは、まず能登半島に行く道が崩れていたり割れ  
ていたりしたのを見て鳥肌がたちました。今までそのよう  
なのを見たことがなくテレビやニュースでは見たことがあ  
るけれど自分の目で見るのは初めてでとてもビックリしま  
した。また、輪島中学校復興支援活動では、学校へ行きた  
いのに行けない小学生の教室作りで、机などを運んだので  
すが、もっときつい作業でも良かったなと思っていました。  
でもその作業が終わって先生方からお礼を言われて、皆さ  
んの笑顔を見られて、やって良かったと思いました。その  
作業が終わりサッカー部のみんなとサッカーをしたので  
すがみんなサッカーをやっている時がいちばん楽しそうで逆

に自分が元気をもらいました。すごく楽しかったです。被  
災地が少しでも早く復興してくれることを願っています。



IPU・環太平洋大学2年 森江 颯斗

まずは輪島中学校復興支援活動に参加させていただき誠にありがとうございました。私は岡山県出身で能登半島災害はニュースでしか知らず実際に赴いてみて、荒れた道路や倒壊したままのビルなど、半年程経っていても復興するのが困難だということが分かりました。私たちが宿泊した

ホテルもまだ断水している部屋や壁が少し崩れている所があったりして多くの人が寝食をする場所なのに、そこに住む人たちの悲しみや苦しみが伝わってくるようでした。私は大した助力は出来ませんでした。IPUサッカー部の一部員として一日も早い再建をお祈り致します。

IPU・環太平洋大学1年 平野 剛輝

能登の復興に協力しました。

IPU・環太平洋大学1年 森口 修都

今回の石川の能登半島ボランティアでは、学校の机や椅子重い荷物を運び、先生達だけでは丸々1日かかっていた所を、自分達の手で3時間くらいで協力して終わらすことができました。大変でしたが、このような活動が今後の人生に繋がって行けばいいなと思いました。また、石川の能

登半島の中学生の子供達とサッカーで触れ合う事ができました。このような自分達の行動が被災地の子供達の勇気付けになればいいなと思います。また、このような被災地に直接行くようなボランティアがあれば積極的に参加させていただきたいです。

IPU・環太平洋大学1年 内山 陽太

能登半島の現状を自分の目で確かめたい、困っている人の助けになりたいと思い、この能登半島のボランティアに参加しました。実際に能登半島に行くと潰れたままの家屋が残っており地面がひび割れたままの箇所ばかりでとても驚きました。そこで学校の掃除や地元の中学生と一緒に

サッカーをしたりしました。自分たちが元気を与えなければいけないのに、逆に自分たちが元気を貰えるくらい輪島中学校の生徒はサッカーを楽しんでいました。今の自分たちがどれだけ幸せな環境にいるのかを改めて感じさせてくれるボランティアになりました。

IPU・環太平洋大学1年 杉森 心相

僕は、この能登半島ボランティアを通して色々なことを感じました。僕は石川県出身なので、この活動募集があった時に絶対行こうと思っていました。現地に着いてみて、一番最初に地面が隆起していたり、陥没していたり、家が崩れていたり、僕が聞いていたよりも酷い状態でした。

自分たちは輪島中学校の椅子、机を運んで掃除をし、サッカー部の子達とサッカーをしました。グラウンドは半分陥没していて、半面だけ使える状態でした。はやく復興して当たり前の生活に戻って欲しいと思います。



IPU・環太平洋大学1年 中村 勇太

今回能登半島輪島中学校復興ボランティアに参加させて頂きとても貴重な経験ができた。私自身、熊本出身で熊本地震を小学校6年生の時に経験し、小さいながらもとても怖いと思ったし本当に死を考えるような状況になったことがあった。そんな中で支えになったのは、避難所で食料支給をして下さるボランティアの方々や自衛隊、また民間で参加して下さった企業などの周囲の人々の力で時間をかけ、建物も精神面もゆっくり建て直すことができた。今回、能登半島のボランティアの募集がサッカー部で行われた時に、熊本地震の経験が頭をよぎりすぐに参加したいと思ったし、私が力になって支える立場になりたいと思った。現地では中学校の中で椅子、机などの運搬作業や清掃などを中心に活動を行った。学校内の壁や床にヒビが入っていて地震の怖さを改めて実感した。また、輪島中学校の生徒とサッカーをして一緒に楽しむことができた。最初は少し大人し

く、心を開いてくれているのか不安だったが、自分から積極的に話しかけ気持ちを打ち明けることでサッカーを通してコミュニケーションをとることができた。最後の写真撮影では生徒達の楽しそうな笑顔を見ることができ、楽しんでもらえて良かったと思ったと同時に自分が力になっていく実感も沸いた。

輪島全体、また能登半島全体が完全に復興するまでにこれからかなりの時間がかかると思うが、自分が被災者の力になったことが一番嬉しかったし、被災者の立場から支援する立場に変わったことで相手の心を思いやる力がつき、より他者視点になって考えることができるようになったと感じた。輪島中学校、輪島市のいち早い復興と精神面での安定が確立するように願って、今ある状況に感謝しこれからの学業や体育会部活動に精進していきたい。

IPU・環太平洋大学1年 松本 風馬

AMDA輪島中学校復興支援ボランティアに参加してたくさん初めての経験をさせていただきました。ボランティア活動自体はやったことがあるのですが、災害系のボランティア活動は初めてで不安な気持ちがありました。まず、目的地に向かう道は近づいていくごとに、道路はがたがたで建物は崩壊しているところがたくさんあり、地震の爪痕というのは深くついているのだなと感じました。また、輪島中学校に着いて周囲を見渡すとグラウンドがほとんど崩壊し、崖のようになっていました。そこで自分たちがグラウンドを広々使えること、サッカーができることは当たり前ではないことを改めて感じさせられました。ボランティ

ア活動での作業は主に中学校の机や椅子の運搬をしたり、掃除などをしたり、最後に中学生と一緒にサッカーをやらせていただきました。被災しても少しでもうまくなりたいという思いでプレーしている中学生の姿に尊敬すると共に、中学生と仲良くサッカーができて良かったです。これからはよりたくさんの方のボランティアに関わり、少しでも様々な地域で貢献していきたいと思いました。



IPU・環太平洋大学1年 松村 直紀

私は、今回能登半島の復旧作業で石川県の輪島市にある輪島中学校の方にボランティアで参加させていただきました。まずこの活動に参加した経緯としては、所属している部活動で参加する人を募集していたのでこれは自分にとって必ずプラスになると思い、自ら参加させていただきました。ボランティアとして行った作業としては、被災にあい、避難所となった輪島中学校の掃除や地元の子供たちがまた学校に行けるように教室の準備として机やイスを運ぶ作業、そして輪島中学校のサッカー部との交流を行いました。正直なところもっとなにか力になりたい、まだまだ出来ることはやりたいという気持ちになりました。今回のボランティア活動で特に印象に残っていることは、サッカーを通して被災された子供たちの顔が笑顔でいっぱいだったことです。その笑顔を見ると自分としてもやりがいや達成感などを感じました。今回の活動のおかげで、支え合う大切さや助け

合う大切さなどが深く学べました。この学びはこれからの人生でも絶対生かせるところがあると思うので、今回の経験を無駄にせず自分の成長に繋げたいと思います。このような経験をさせていただきありがとうございました。そして被災された方々が1日でも早く元の生活に戻ることを願っています。

IPU・環太平洋大学1年 橋本 翔人

私は今回の輪島中学校復興支援活動に参加して、改めて今の環境が当たり前ではないんだと強く感じました。地震があり酷いことは知ってはいましたが、テレビで見ると実際の目で見るとでは震災の恐ろしさというのは全く違い、心が痛くなるような場面を目にしました。ですが、地域の方に話した際には、とてもショックを受けてはいましたが、すぐ前向きな姿勢でこれからの復旧作業に取り掛かりたいと言っていた言葉が今でも忘れないくらい響きました。テレビで見ていると、大変そうだな、やばいね、みたいな感じで見ていましたが、焼け野原になった地域、崩れ落ちた家などが今になってもあり続けている現状をみ

ると何か少しでもできることはないのかなど考えるようになりました。中学校で一緒にサッカーをしましたが、コートが半分が崩れ落ちている状況にも関わらず、端っこの狭いコートで楽しそうにサッカーをしている子供達が印象的でした。自分たちには照明もあり、芝生のグラウンドで毎日サッカーができていたことは当たり前ではなく、とても贅沢なことなんだと感じました。こういった中々ない経験を今回させてもらって、今後の人生にとても欠かせない経験になったと思いました。大学生活でも活かされることは活かしていきたいと思います。

IPU・環太平洋大学1年 若尾 以心

能登半島でのボランティア活動を終えて、地域の人々の温かさと強さに深く感動しました。震災後の復興支援に携わる中で、住民の皆さんが見せる不屈の精神と共に、地域コミュニティのつながりの大切さを実感しました。どんなに困難な状況でも助け合い、支え合う姿勢があふれており、

自分が少しでもその一助となれたことに大きな意味を感じました。また、自然災害の恐ろしさとともに、それに立ち向かう人々の力強さに勇気づけられました。今後も地域復興の一端を担いたいと感じ、学んだことを胸に、次のステップへとつなげていきたいと思います。

IPU・環太平洋大学1年 大江 凌駕

今回のAMDAさんの輪島中学校復興支援活動に参加して思ったことは、私の地元である阪神・淡路大震災もすごい被害だったのかなと改めて思いました。この地震で祖母は片目を失い、今はほぼ見えない状態で暮らしています。普通だった暮らしが急に奪われてしまうという苦しみや悲しみもすごく今回のボランティア活動で感じるものがありました。

1番印象に残っているのは家の上にビルが横たわってい

たところでした。絶句でした。後から聞いた話で家の中にいた人がなくなってお父さんだけが生き残っているという話を聞いて心がキュッと引き締まる思いにやられました。普通に楽しく暮らしていた日々がほんの一瞬で無くなってしまふのは、体験した人にしかわからない思いがあると思います。これから地震が起きた時に自分がどこに逃げてどう対処して行くべきか考えようと改めて思いました。



(注)所属・肩書は派遣当時のもの・メッセージは原文のまま掲載しております。